



Title	「個展＋研究発表展 木で作り，木について研究する。」 展覧会のデザイン
Author(s)	落合， 里麻
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71206
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

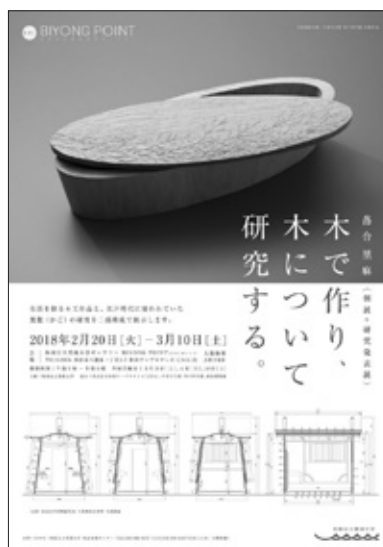
「個展 + 研究発表展 木で作り、木について研究する。」

展覧会のデザイン

落合里麻 東北生活文化大学

2018年2月20日から3月10までの期間、秋田公立美術大学ギャラリー BIYONG POINTにて、「個展 + 研究発表展 木で作り、木について研究する。」を開催した。この展覧会は、筆者本人が秋田公立美術大学に勤めた5年間の研究活動を紹介するものであり、専門分野である木工の作品と、江戸時代の乗物・駕籠の研究について、2部構成で展示を行った。本稿はその実践報告である。この展覧会の特徴は、作品制作のみならず、企画、パネル制作、会場レイアウト、壁の製作、会場設営等、担当者の協力を得ながらも、関連する仕事を一貫して行ったことである。一人の人物の成果発表の場とはいえ、木工作品と研究ではアプローチも成果物も異なる。そのため、約39㎡の展示会場を仕切り、ライティングを変えつつ、完全には分断しない方法で会場構成を考えた。

このギャラリーでは、それまではアート作品の展示が多く企画されてきた。個人の研究についての展示は初めての試みであったが、「研究を展示する」ことに対しては美大関係者のみならず一般の来場者の意見も含めて、高評価であったと感じている。作ることから



展覧会のポスター



江戸時代の交通文化を担った乗物と駕籠（研究発表展）
会場の様子

〔展覧会 開催概要〕

展覧会名：個展 + 研究発表展 木で作り、木について研究する。

I. 木の素材感×かたち（個展）

II. 江戸時代の交通文化を担った乗物と駕籠（研究発表展）

会期：2018年2月20日（火）— 3月10日（土）

会場：秋田公立美術大学ギャラリー BIYONG POINT（ビヨンポイント）

秋田県秋田市八橋南1丁目1-3 秋田ケーブルテレビ（CNA）内

主催：秋田公立美術大学

協力：株式会社秋田ケーブルテレビ（CNA）、中谷宇吉郎 雪の科学館、郵政博物館

秋田公立美術大学 企画・運営担当者：菊地暁子、越後谷洋徳、浦中廣太郎

始まり、その視点が研究に繋がったという道筋についても説明しやすい空間となった。ここからは主に研究発表展の展示内容・空間デザインについて述べることにする。

乗物と駕籠の研究は、2013年から個人研究として始めた。全国の博物館や寺院にて、観察と実測を中心とした現地調査を行い、その結果を基に本部のつくりや材料、デザインについて分析・比較する。そしてそこから当時の製作方法や考え方を明らかにしていくという流れである。これまでに乗物・駕籠合計82挺を確認し、35挺について具体的な調査を行った。調査結果から、乗物・駕籠それぞれについて、外観が異なっているにもかかわらず共通する主構造（骨組み）があること等を明らかにした。地域による特徴があまり見られないことから、全国的に雛形のようなものが存在したとも考えられる。このような一連の流れと内容が伝わるよう、展示会場には研究の概要を解説したパネル、現地調査の場所を示した全国地図、江戸時代に製作された辻駕籠の模型（郵政博物館より借用）を展示した。模型は唯一の立体物であり、これによって空間のバランスが良くなると感じた。研究対象物が立体であるのに印刷物のみで展示するという方法を取った場合、実感に欠けた展示になりかねない。

研究の過程において実測を行うと前述したが、現地で手描きした図面は必ず AutoCAD を使って正確な図面に描き直している。製作場所や保管場所が異なる乗物・駕籠を同じ図面形式で記録することによって、装飾や個人の感覚に左右されずに比較・分析ができるのである。CAD による実測図は、そのような作業のための元データとして作成しているもので、通常は自分が使用するためのデータである。だが今回は、研究の結果や成果を展示するだけでなく、「研究の過程で出来たもの」を展示することのおもしろさを考え、実

測図15点を展示した。実測図は通常 A3 サイズで複数枚に分けて収めているが、今回は横幅1.3m の1枚の図面としてレイアウトし直し、写真と簡単な解説（地域、由来、分類、特徴等）とともに壁面に展示した。図面を読み慣れない人にとっては複数枚に分かれているだけで理解しようという意思が薄れてしまうと考え、そのような人にも絵のように見てもらうための工夫である。多くの来場者は乗物・駕籠の種類の多さや、図面にしたときの形状の違いを初めて目にしたようだ。さらに、秋田市内にある天徳寺所蔵の惣網代乗物の原寸大図面を幅4mの壁面に展示した。大きさを実感してもらうことを目的としてこのような展示を企画した。秋田に現存し、寺院の乗物の中では最大級、さらにつくりが精巧なものを選んだが、「意外と小さい」という意見が多く聞かれた。この経験から、立体物を二次元で表すと縦・横の寸法は確認できるが、ボリューム感が実感として伝わるとは限らないということがわかった。

実測図は調査の積み重ねによって徐々に数が増えていく。そしてそれらが一ヶ所にまとまって存在するようになると、アーカイヴとしての役割も持ち得るのではないか。展示期間中にはそのような意見が交わされることが度々あり、単なる手段や記録以外の役割の可能性を感じた。

乗物・駕籠の研究は歴史学や民俗学の立場からも行われているが、それらの成果は多くの場合、文章と数点の図版で示される。実際は色も形も仕上げも様々で、現在のところ、非常に似ている仕様であっても完全に一致するものは確認されていない。それが当時のものづくりのおもしろさであろう。今回の展覧会で得たことを活かし、今後もそのおもしろさを伝える活動を続けていきたいと考えている。